

樺太引揚者のその後

—R7年度聞き取り調査の報告—

尾曲香織・石子智康

Key Words 樺太 (Sakhalin)、恵須取 (Uglegorsk)、引揚者 (Returnee)、戦後 (Post-war)、引揚後の生活 (Post-reratriation life)

1 はじめに

本稿は、当館で実施している「樺太記憶継承事業」の一環として行う聞き取り調査の内容を報告するものである。「樺太記憶継承事業」は、令和3(2021)年に解散した全国樺太連盟(以下樺連と表記)から、北海道への要望である樺太の記憶の継承について、同連盟の寄付金を基金とし、令和2(2020)年から行われている事業である。令和16(2024)年まで15箇年をかけ、御寄贈いただいた資料の整理、関連する資料の収集や聞き取り等の調査研究の実施、資料整理や調査研究成果の利活用等を通して樺太の記憶継承に取り組むものである。令和6(2024)年3月には文書や図書資料の目録を(北海道博物館 2024)、2025(令和7)年3月には写真や図書、生活資料等の目録を発行した(北海道博物館 2025)。また、2025年7月に北海道庁赤れんが庁舎(旧本庁舎)のリニューアルに伴い設置された樺太関係資料室では、北海道保健福祉部主体の事業として樺太に関する常設展示が行われ、目録に記載した資料群の一部も公開中である。

これまで樺太を対象とした歴史研究の多くが、引揚げ以前(日本が領有していたころ)、北海道以南への引揚体験、引揚げ後の生活という三つの時期それぞれ個別に論じられてきた。そして引揚体験については、個人史も含め多くの記録が残され、また各地の資料館等の展示で活用されている。一方引揚げ後の生活については、ライフストーリー的手法により、引揚げ以前の暮らしからの一連の流れとして、語りを記述もしくは手記されてきた(田中・ゲンダーヌ 1978; 藤村・若月 1994; 太布 1998; 安部 2015など)。こういった記録は、それぞれも注記しているように、記憶をもとに作成しているため、年代や場所など事実とは異なる場合もある。とはいえ、引揚げの当事者やその家族らが当時の出来事をどのように感じ、捉える、あるいは捉えなおしているのかを

も記録できるという点で有効であると考え。そこで、「樺太記憶継承事業」における聞き取り調査も、樺太引揚者及びその家族を対象とし、樺太に移住あるいは生まれて以降、どのようにして引揚げ、引揚げて以降どのように暮らしてきたかという一連の流れを聞き取る。そして可能な範囲で各種記録との照合を行い、情報を補って公表する。このような作業を通じ、個別の事例の集積を図ることを企図する。これらの個別の事例の収集・公表は、これまで行われてきたような研究、例えば聞き取りをもとに、樺太から引揚げた女性がどのようなキャリアを積み、引揚体験をどのように振り返るかを記述した論考(尾曲 2021)や、引揚げ当事者の手記をもとに、歴史研究において個別に検討されてきた引揚げ以前の樺太植民地期から引揚げ後の記録についてどのように読み解くかを考察した論考(洪・田原 2016)のような、聞き取りや手記をもとにした研究に寄与することができると考えられる。さらに、引揚げの当事者たちが新たな社会空間や文化を創り出したことを明らかにした研究(島村 2013)のような、より巨視的な研究にもつながる基礎的な作業ともいえる。

令和7(2025)年度の聞き取り調査は、4月から11月までに、2名(男性1名、女性1名)を対象として実施した。本稿2章以降に、そのうちの男性1名の事例を記述する。

2 恵須取から引揚げた男性

(1) プロフィール

本章で紹介するのは、昭和15(1940)年に樺太の恵須取町で生まれ、昭和21(1946)年に引揚げた男性、A氏である。A氏は5人兄弟の末子であり、生まれ順は長姉(昭和5年、留多加町生)、長兄(昭和6年、大泊生)、次兄(昭和8年、大泊生)、次姉(昭和11年、大泊生)、そしてA氏である。本章は、令和7(2025)年

10月21日に実施したA氏への聞き取り及びA氏の長兄が
かつて父から聞き取り、平成28（2016）年に作成した
家族の経歴のメモをもとに記述する。

A氏の父は明治35（1902）年に鳥取県鳥取市で生まれ
た。鳥取県立商業学校を卒業した大正10（1921）年に
渡道し、利尻島鬼脇にあった缶詰工場にて勤務する⁽¹⁾。
大正12（1923）年の2月から3月にかけて兵役に出て、
昭和2（1927）年1月15日には缶詰工場の倒産により退
職する。そして理由は不明だが、同年樺太へと渡り、1
月19日には樺太豊原区裁判所書記官として勤務を始めた
という⁽²⁾。そして、昭和4（1929）年に妻と結婚し、
昭和5（1930）年から17（1942）年までの12年間、樺
太豊原区裁判所出張所長として留多加町、大泊町、恵須
取町へと赴任した。退職後の昭和17年には、恵須取町に
て司法書士として開業していた。母は岩手県水沢市周辺
の出身で、その後樺太に移住し、父と結婚した。

(2) 出生から引揚げまで（昭和15～21年）

A氏が樺太で暮らしていたのは、生まれた昭和15
（1940）年から昭和21（1946）年、A氏が6歳になるま
での期間である。

ソビエト連邦（以下ソ連と表記）と昭和20（1945）
年8月15日以降も交戦状態にあり、父と長兄を除いた一
家はリュックサックを背負い、駅のある内路まで95km
あまりを歩いて逃げた（図1）。A氏の父は兵役のため
不在にしていたものの、帰って家族がいなか探し回っ
ていた。A氏の長兄は恵須取中学校の学生だったが、こ
の時は援農に出ており上恵須取にいたため、友人と共に
逃げて汽車で南下した。A氏は6歳で幼いため、父親と
同郷で同業者でもあったB氏の自転車の後ろに載せても
らって移動した。

8月19日か20日には、父と長兄以外の家族は内路駅か
ら大変混雑した貨車に乗り、大泊へと向かった。豊原駅
で下車した一家は、樺太師範学校に収容され、一週間程
度そこで過ごした。一方長兄は、大泊駅にて下車し、船
で北海道へと向かう予定だったが、友人から自分の家族
が豊原師範学校にいるらしいと聞き、豊原駅へと引き
返した。豊原駅に到着する直前には、豊原駅がソ連軍に
よって爆撃されて延焼していたものの、難を逃れた長兄
は母の姪の勤務していた豊原の病院へと立ち寄ったあ

と、豊原師範学校へと向かい、無事家族と合流するこ
うできた。

一週間ほど樺太師範学校に収容されている間、周囲の
人々が知人などを頼って出ていく様子を見て、一家も父
の友人を頼り、出ていくことにした。父の友人宅に到着
した2時間余りあとに、偶然父もその家に立ち寄ったた
め、再会でき、2日後の8月24日頃に、一家は大泊へと
向かった。父は大泊での勤務経験もあり、土地勘がある
こと、そして引揚船が大泊から出るであろうと考えたた
めであった。しかし、すぐに引揚船は出ることができず、父
は大泊にあった市場の管理官として勤務することになっ
た。大泊の家の近所には、ソ連軍の家族数軒が暮らして
いた。

昭和21（1946）年11月に、引揚命令が下り、一家は
引揚船に乗るために真岡へと移った。真岡では真岡高等
女学校の収容所に収容され、12月21日に引揚船⁽³⁾にて
北海道へと向かった。途中海上が時化たものの、22日
には無事函館へ到着した。

函館では鶴岡町にあった援護寮で2～3日過ごし、引
揚げ後の行き先を上磯町（現在の北斗市）と定めた（図
2）。そして、12月25日に、上磯町の広徳寺に無縁故引
揚者として入ることとなった⁽⁴⁾。12月27日には、上磯
町久根別にあった、かつて鉄工所の社宅であった家屋に
移った。このとき、両親とA氏も含めた兄弟5人、そし
て樺太から一緒に引揚げてきた母の姪（A氏のいとこ）
とで暮らしはじめた。

(3) 引揚げ後から就職まで（昭和21～34年）

住居はなんとか手に入れたものの、父は職を探してい
た。そこで母は毎日、購入した米などを函館へと行って
売り歩き、生活を支えた。そのような状況ではあった
が、父は子供たちに学校へ通うことを強く勧め、12月に
長姉は北海道庁立函館高等学校4年生、長兄と次兄は
北海道庁立函館中学校の3年生と1年生、次姉は上磯町立
上磯小学校の5年生へと編入した。周囲の子どもたちは
家計のために多くが働いていたことから、A氏の長兄は
大変印象的な出来事として記録している。

その後、上磯にて長姉の通う女学校の地区懇談会が行
われ、帰りに同じ汽車に乗り合わせた校長が長姉に父親
の状況を尋ねた。長姉は、父は職を探している、と答え

(1) 利尻島における缶詰工場については、明治40年の鬼脇村での着業が創始とされている。A氏の父がどこの工場勤務していたかは不明だが、当時利尻島内では、タラの肝油、カニなどの缶詰が生産されていた（利尻富士町史編纂委員会 1998：913-922）。

(2) 辞令等の書類は確認できなかったが、昭和10年に発行された『樺太庁職員録』によれば、同年8月1日時点で留多加出張所の裁判所書記として勤務していたことが確認できる。

(3) 『函館引揚援護局史』によれば、この年、引揚船4隻が真岡港へは12月2日から4日にかけて、函館港へは12月5日から8日にかけて入港している。そして、引揚者の函館への上陸は12月10日から13日にかけてのことであり、残されたメモとの齟齬があるものの、本稿ではそのまま記載する。

(4) 広徳寺は、文化7年に曹洞宗の観音庵として建立された（上磯町 1997：657）。引揚者の一時収容のため、寺院も協力し収容する例は多々あった（札幌市教育委員会 2002：509-512）。

たところ、ちょうど事務職員1名を募集しているから、と昭和23（1948）年4月より北海道函館西高等学校にて事務員として働くこととなった。このことを長兄は「いろいろ書いたが、父の職が決まったことが、●●（筆者註；苗字のため伏せる）一家の幸せの生活の始まりだと思う」と記述している。

A氏はその前年、昭和22（1947）年4月に上磯町立上磯小学校へ入学、昭和27（1953）年3月に卒業、同年4月に上磯町立上磯中学校へ入学、昭和31（1956）年3月に卒業し、同年4月に、北海道函館西高等学校へと進学した。

ここで、A氏の兄弟の昭和21年以降の経歴について記述する。A氏の長姉は昭和23（1948）年4月より上磯小学校にて勤務、昭和31（1956）年3月に結婚のため退職し、主婦となった。長兄は昭和25（1950）年3月に北海道立函館高等学校（現在の北海道函館中部高等学校）を卒業、4月から北海道大学に通い、昭和31（1956）年に北海道大学大学院の修士課程を修了、道内で高校の教員として退職まで勤務した。次兄は昭和27（1952）年3月に函館西高等学校を卒業し、同年4月に北海道学芸大学（現在の北海道教育大学）に入学。昭和31（1956）年3月に卒業、同年4月から中学校の数学の教師として1年間勤務、その後高校の教員として平成6（1994）年の定年まで勤務した。次姉は、昭和23（1948）年4月に上磯中学校に入学、昭和26（1951）年3月に卒業、同年4月に函館西高等学校に入学、昭和29年3月に卒業し、同年4月に北海道学芸大学に進学した。昭和31年に卒業すると家庭科の教師として数年勤務し、結婚を機に退職、主婦となった。

長兄以下兄弟が大学に進学していることから、A氏も進学することを考えていたが、ほかの兄弟のように教員志望ではなかったこと、母の故郷である岩手県に興味があったこと、山登りが趣味であったこともあり、岩手県にある岩手大学農学部林学科へと進学した。

（4）就職から現在まで（昭和38年～現在）

大学卒業後、北海道に帰るつもりであったことから、北海道職員の試験を受け合格、昭和38（1963）年4月から北海道留萌支庁にて勤務する。4年後の昭和42（1967）年7月に、北海道庁の林務部へと転勤、そして根室支庁、胆振支庁と道内各地を転勤した。その間結婚し、二女をもうけた。

この間、樺太引揚時にA氏を自転車の荷台に乗せてくれた男性B氏に病気見舞いを送ったり、北海道職員が加入している樺太出身者の会に加入したりしている。樺太出身者の会は、お互いの親睦を深めることを目的に作られ、飲み会などを行っていたが、現在の活動状況につい

ては不明である。

北海道庁では、林務部での森林整備や森林学習やレクリエーション等をできる森林総合利用施設の整備のほか、労働観光課で一村一品運動にかかわったり、情報管理課で通信料金の値下げに奔走したりするなど、様々な分野の仕事に携わった。50代以降は、知事室長や十勝支庁長などを務め、平成12（2000）年に60歳を迎えて定年退職となった。

退職後は、道内航空会社で平成13（2001）年から平成15（2003）年まで社長を務めた。就任した年には、アメリカの同時多発テロが起こったために、世界的に航空機の利用を控える流れになり、大変苦労した。航空会社の退職後は、これまでの経験を活かし、各種団体の役員などを現在まで務めている。

この間の平成25（2013）年には、かつてA氏が根室支庁にて勤務していた際に付き合いのあった羅臼町役場の元職員（昭和3年生、男性）から、手紙と、平成16（2004）年に地元の公民館に依頼されて書いた、平成7（1995）年の樺太への墓参について記事を受け取っている。手紙にはA氏が雑誌に掲載され、そこに恵須取出身であると記載されており驚いたこと、自身も恵須取出身であり、どのように引揚げ、その後どこで働き、どのように生きてきたか、また一緒に働いた際の思い出などを書き連ねている。そして最後に「懐かしさのあまり長々とくだらぬ事まで申し述べ大変失礼いたしました。」、「Aさんが、まだまだ元気に活躍されていることを知り、嬉しさと、懐かしさの余り本当に失礼いたしました。」と書き添えている。A氏との思い出はもとより、同じ樺太の恵須取出身である、ということが彼にとっていかに重要であり、嬉しく感じられたかがうかがえる。

3 おわりに

ここまで、ある樺太引揚者の引揚後の生活について、聞き取りや家族による経歴のメモをもとに記述した。A氏自身樺太から引揚げる際の記憶があり、特に父の知人の自転車に乗せてもらったことが印象的な出来事として語られた。

A氏の両親とも道外出身であるものの、地元へ帰らず無縁故者として上磯町で暮らし始める。頼れる親戚が近くにいるわけであれば、母がいわゆる担ぎ屋のような仕事に携わり、糊口をしのぐような状況でもあったものの、長兄のメモにある父の「財産も何もないが、何とかなるだろうから、お前たちは学校へ行け」という言葉からは、引揚げ後に社会で生き抜くために必要なものとして、教育に対する強い期待がうかがえる。これは、父自

身の経歴から推察するに、缶詰工場退職後の生活において、教育や資格といったものの重要性を認識していたということであろう。

就職し社会に出て以降、おそらく引揚時の年齢が幼かったこともあり、引揚者団体等に積極的にかかわることはないものの、北海道庁内の樺太出身者の会に加入している。自身の一面として「樺太出身者である」ことが意識され、他者とつながる一つのチャンネルであったことがうかがえる。また、かつて一緒に仕事をした男性からの手紙や手記を受け取った経験は、樺太出身者であることを公表することで、仲間意識が強まり、旧交を温めることにつながったということを示す例といえる。今回の事例では、樺太からの引揚げという大きな出来事から時間が経過したものの、その後の人生の中で樺太からの引揚者ということが意識されるような出来事や、自分自身の人づき合いを形成する中で改めて意識にのぼる機会があったことがうかがえる。のちに生活基盤が整っても、その出来事が本人や家族の人生に与える影響がどのようなものであったか、そこまで追い、記録することが戦争について改めて考えるうえで重要な材料となるであろう。今後も関係者の皆様にご協力いただきながら、本事業を継続していきたい。

参考文献

- 安部洋子 2015. オホーツクの灯り—樺太、先祖からの村に生まれて、クルーズ.
- 尾曲香織 2021. 樺太引揚後の生活とその位置づけ—ある女性の回想から—. 北海道の文化 93 : 13-22. 一般財団法人北海道文化財保護協会.
- 尾曲香織・石子智康 2025. ある樺太出身者の引揚げ後の生活—幼少期の引揚体験と自身の経験の振り返りについて—. 北海道博物館研究紀要 10 : 93-101. 北海道博物館.
- 上磯町史 1997. 上磯町史 下巻. 上磯町.
- 樺太庁長官官房秘書課 1935. 樺太庁職員録.
- 洪郁如・田原開起 2016. 朝鮮引揚者のライフ・ヒストリー—成原明の植民地・引揚げ・戦後. 人文・自然研究 10 : 147-180. 一橋大学大学教育研究開発センター.
- 札幌市教育委員会編 2002. 新札幌市史 第5巻通史5 (上). 札幌市.
- 島村恭則編 2013. 引揚者の戦後. 新曜社.
- 田中了・D.ゲンダーヌ 1978. ゲンダーヌ. 徳間書店.
- 太布磯雄 1998. 東経一四十一度. 生涯学習研究社.
- 日本国有鉄道 1980. 北海道鉄道百年史 中巻. 日本国有鉄道北海道総局.
- 藤村久和・若月亨編 1994. 札幌テレビ放送株式会社創立35周年記念出版 ヘンケとアハチ. 札幌テレビ放送株式会社.
- 北海道博物館編 2024. 北海道博物館資料目録 3. 北海道博物館.
- 北海道博物館編 2025. 北海道博物館資料目録 4. 北海道博物館.
- 利尻富士町史編纂委員会編 1998. 利尻富士町史. 利尻富士町.

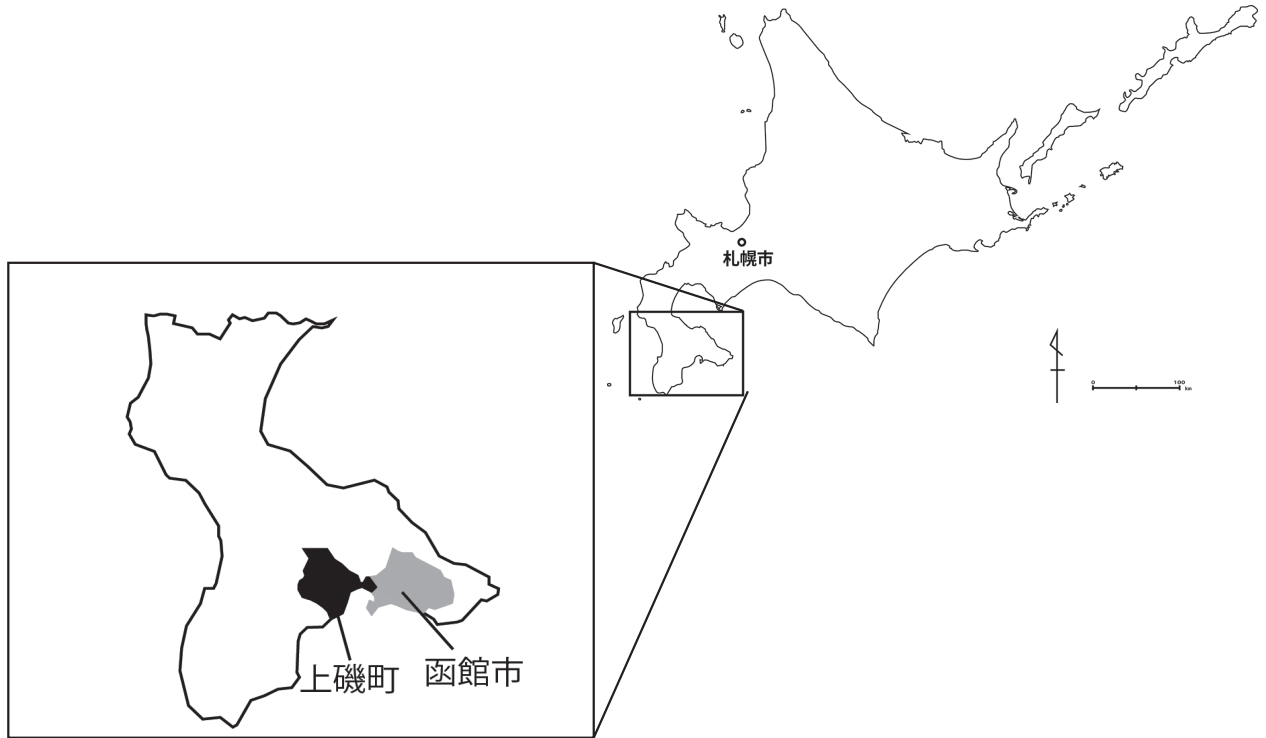


図2 引揚げ後の関係先

Life after Repatriation from Karafuto: A Report on an Oral History Survey Conducted in FY 2025

OMAGARI Kaori and ISHIKO Tomoyasu

Based on an oral history interview, this paper documents the life of a man originally from Karafuto (present-day southern Sakhalin), with particular focus on his post-repatriation experiences. The subject of this study was born in 1940 in Esutoru, Karafuto, and was repatriated to Hakodate, Hokkaido in 1946. He later relocated to Kamiiso Town (present-day Hokuto City).

In the difficult post-war economic conditions, children in the surrounding community were required to help with household labor. However, in accordance with his father's wishes, this man, together with his two brothers and two sisters, was able to attend school. All four went on to higher education, with the other three becoming teachers while the man himself was employed as a civil servant for the Hokkaido government. Although he usually did not consciously regard

himself as a repatriate, there were occasions when his background became relevant while forming connections with others. During his period of employment as a Hokkaido prefectural government official, he belonged to a social association composed of prefectural employees who were also from Karafuto. Even after his retirement, on occasion, former colleagues contacted him upon learning that they shared the same place of origin, and his background as a repatriate provided opportunities to renew past relationships.

To better understand the experiences of repatriates from Karafuto, including their lives after repatriation and the ways in which this background influenced their later lives, it is necessary to accumulate further case studies of the kind presented in this paper.

